里見八犬傳

拾九編

五十一

へ13
709
103

遠門 13
號 709
卷 103

明治三六年十月九日購求

南總里見八犬傳第九集巻之五十一

東都　曲亭主人編次

第百八十回下

義成功臣を重賞して八女を妻を重出
信隆舊城に還任して罪過を免る

再説。義成主は八犬士四家老辰相清澄らを召聚て且宣ふやう。這回柳丸は直元貞住等を従ふて参向する。真利谷の老母が我近習に就て請ふ旨あり。其所以は柳丸は一個の女兒あり。葛羅媛と嘆做して今茲は十六歳に做りぬ。是が爲に婚姻を徵れども。いまだ相應しき所縁いまだ願ふに安房上總なる諸城主の子息達を擇せるひて。這婚姻を御媒妁ゆゑ幸甚しからんとのたまふ。真利谷は我外戚なれば。他等が情願由なきにあらず。我も亦憶ふ美あるこどもそれとうも猶いそぐべき汝等も知る如く我に八個の女兒あり。開が中に妾腹なるもヨヌクれど其母或は産後に

身故り。或ハ短命なりけまべ。皆吾孀が養ひめて年迫ふりふり。有徒れば孰も嫡腹ふ異ふ。我も亦他ぞが為ふ。左さ〳〵塔を擇ぶ。一女もいまぞ所縁ふ。反て他ぞが幸ふるかな。我今八個の女児をもて八犬士ぞふ妻せまく欲をいでも。犬士の賢き其忠其功八人なり。我女壻ふ做まふ足まり。各這意を汲よかし。亦他事もなく仰まれべ八犬士ぞハ阿とだりふ応難しる。亦が程ふ辰相と清澄ハ。俱ふ答禀まやう。御意美りなりぬ八犬士ハ伏姫上の御子なるべ。宿因あり。然バ賢慮の至所誰り不の字を禀まべき臣ぞも其美を豫より願〳〵こそいひけれと。ふを道節推禁めて。御家老亦ハ悍りなり。臣ぞが思ふよりハ。抑臣ぞ義兄弟八名ハ當家ふ宿因ありとも。只一戦の微功をもて各城主ふなされ。まふ。胸安くなるる所ふ。然るを況姫君達をもて妻と〳〵下しふ。盈て溢る。冥加ふ盡んよの義ハ獨忠與が賢達て辭ひ禀まふ。都一心異體る義

兄弟ぞも同意ふとと。議して左右を見久まべ。戍孝亂智自餘の犬士も。然〳〵。然〳〵と點頭て。大山説ふて寔ふ好恁ふ。畏けまども。目今館の御威德もて。姫上。建を近國る大諸侯ふ妻せるふとも。皆欣びて是を容まん。何ぞ家臣の渾家ふ。做さんや。且臣ぞ八名ハ伏姫神の故をもて。夙く知ら。且まつりしらども。仕ふる所ハ。新参ふて勤労久しくなるふ。上大夫の席ふ置まて。采地一萬實の城主ふ。最過分き君恩ふて。人の娼嫉も。影護る。然を又御配偶ハ實ふ是物体ふ。約莫人の臣として。富貴其君を推と。紀ハ亡ざる者ふ。稀之伏請御家老建。臣ぞが為ふ御配偶の。御沙汰を禀。止めなば。猶との上の幸なん。いでくと諄。返も甲一夕乙一夕。迭ふ語を續言を續て。一口中より出るが如く。連りふ推辭て已。ざりしを義成主推禁めて。然なりれそ大氏の毎非如連城の大諸侯なりとも。賢ふ。憑ざして富貴を負ひハ我欲せざる所之。然バ忠臣ハ位貴く任重くして兵權

嘗ゆゑありとの人どもいよ〳〵忠誠ゆゑ其君を後ゆまもるとて蜀漢の諸葛武侯我國士南朝なる北畠准后の如き是之矧又我八犬の賢臣をひていまゞ嫁ざる八個の女児ゆゑ竟ゆ犬氏ゆ妻まろへ抑又天縁ゆゑ我意既ゆ決せり必ゆ辭ひそと面正〳〵ぞ諭のふ君命脫ゆ路もうゆ八犬士ゆへおろく。稍言美を稟きゆぞ辰相清澄も欣びて直元貞住共侶ゆ祝して千歳をぞ唱へける當下義成又宣ふやう柯を伐者い必斧をもてき妻を娶る者い必媒をもてき周人の詩ゆ詠まろ所載て三百篇の中ゆ在り今我六郎兵庫助をもて這婚姻の媒妁ゆせん武者助雜魚太郎い俱ゆこの美を相副て有司ゆ所要を課まべ〜但〜我八個の女児い年ゆヲヌ少ゆりとの人ども犬士の年い相似う犬阪犬江只是のみ自餘の六犬士ゆ年劣りて然べ今孰をもて孰ゆ妻せんとの美分別まへらゞぞ誠や和漢古俗の常言ゆ約莫男女の疋配い其神ありて是を嘗る我國俗の道〳〵年の十月毎ゆ諸神出雲の大社ゆ聚合ゆして世間の男女の爲ゆ疋配を做〜ゆふとりて又唐人のゆ呼も是ゆ似う或いの月下ゆ一個の公羽ゆり書冊を開きて是を見る世間良賤男女の姓名と其年歳を識ざる者ゆるとて〜是ゆよりて赤繩をもて男女の脚ゆ繫ぐとい非如雙言敵へとそも夫婦ゆ做らざることを以ぞ或いの氷下ゆ両個の人ゆり相對て相譚を氷上の人是を穿べ世ゆ在る所の男女の疋配のつひとりまりて媒妁児を月老と云又氷人とのゆ又唐山の妓院ゆて祭る神を白眉神とのゆ國俗の呼云かゝふゆ神ゆ似て月老氷人と同ゞくゆぞ开い左まれ右もゆれ我女児ゆの疋配い他ゆふ各一條の繩を合せて大士ゆふ是を牽せん其繩の本ゆい一條毎ゆ名簿を締着誰繩ゆて知らまべ〜大士ゆ各其牽所の繩ゆよりて甲い乙丙い丁と妻ゆる窓を知るとゆへ天縁とのつべ〜縱此二の過不及ありとも誰ゆ訴誰ゆ怨ん這美

什麼と詳なる示談ふ辰相清澄ゆゑに直元貞住共侶ふ只管ふ感じて己が
八犬士ゆゑも今ようふ異説もべくもあらざるべ其計ひの精妙なるを稱て羽織を
つまーくべ義成主うち含笑て然い我も欽び思へり事生急ふ似くれども今日ハ黄
道吉日ゑ先赤縄を行ひてん女子い夜を宜とき去の故ふ婚姻の誓の字ハ女ふ從ハ
昏ふ從へり犬士ゆゑに點燭時候より。俱ふ朝服を整へて六郎兵庫助ゆゑを案内
ゆ出居の方へまを奏るべ既ふ我女児ゆゑ去のこころを汲させーうべ准備を做と
ゆどめくんまふむ徒而這八士八女の姻組相定りて納采の礼を行ふとも婚姻い
桃の夭々たる來春二月下旬ふ做まべ犬士の地ゆゑ城ゆゑ者ふハ修造料ーて
金三千両とのべ速ふ工を起して城郭修造をいそぐゆゑ來春婚姻の祈まぶ
家作ハ大槩改成まべ豫去の礼をとろ汲てよと言叮嚀ふ示ーるべ犬士ゆゑ齊一
額を衝て君恩迚る所ゆゑを拜ーまるり。おそるゝ其欽びを稟ーけり姑且ーて

親兵衛ハ辰相清澄ふうち向ひて言卒介ふいへども禮ふ男子ハ三十ふーて室
ゆり後世い和漢是ふ拘らぜ十七八より娶る者ゆまども臣ゆゑハ年尚十五ふ
足らぎ勿論仙くーて男女の婚姻を定るを唐山ゆゑハ結髪の夫妻とふ
國俗の所云ゆゑ是より考へて成長ふ及びて婚姻を執行ふ者ゆゑ是ゆり。
いまだ十六歳未満ふして婚姻を做を男子ゆゑを使ゆるぜ臣ゆゑも亦是ふ
結髪の礼ハ兼まるべ婚姻合巹の大禮い御猶豫をと願ーけれと推辭を義
主うち受て親兵衛。年ハ理りゆゑふ似くれども我思ふよーハゆゑらぜ汝ハ生年
二五ゑまども身の長い十七八ゑる少年ふ異ゑらぜ膂力ハ萬夫ふ敵まべく心
術ハ白頭ゑる宿儒も及ざる所ゆり。何ぞ只年を數へて婚姻を遲礙せんや旦明
春の婚姻ふ汝一人を漏ーるべ汝の妻ゝらん者必や怨むべ。娶りて後十七歳
まで閨房を俱ふ為ぬるとも又俱ふ甘ざるとも开い我知る所ふゆゑぜ只常人の上を

して年を論じて云々と推辭い要るべきのみとそと理通て諭の久べ辰相清澄勝を找めて御諚寔ふ其理あり。親兵衛が奇才なるも其義ふ思ひ足らざりしハ年ふ泥ミ故ふとそと孰合されば七犬士なるも犬田豊後を目ゆて仁ふ代りて教命の欽びを稟をゆど親兵衛今ハ已とを込ぎ四家老なるふ同じて卒介の異義を謝ふける。信而ハ大士四家老い今宵の一義をのそゞれて身の暇を賜りて退りて准備を做を程ふ秋の日早く暮初て點燭時候ふ做りしるべ犬塚信濃犬川荘介犬山道節犬飼現八兵衛犬田豊後犬村大学犬阪下野犬江親兵衛ハ俱ふ光絹衣長社祢ふて東辰相荒川清澄ふ引きつく後堂と前亭の間ある山雞の間ふ伺候を序次程よく羅列れる。左右ゆ銀燭いくつともるく建列ねて白晝の如く明かるふ夜の櫻の杪ふ似る犬士の骨相同じくらねど孰も二十前後なる威風凛々として反て猛るぶ笑るとそハ三歳の小児もるぶくべく怒るとそハ蓋世の勇士も憚るべ面目あり浅黒きあり。身長高ひあり高くふざるあり鼻直く唇横る八面の相似るも並てハ同じくふざるふあるを是仁義八行の玉を連ね。好男子劣勝りへるるけるまの玉前面の坐席ゆハ錦繡の間道ゆる翠簾を透間るるく掛垂て這裏面を姫上達の着坐とき其処ふも銀燭多るべ翠簾の間洩灯花ハ殼香とぶれて風さそふ春の曛昏ふも似るるべく色濃るりける丹楓の山ふ秋の斜日の刺きゞ如し誠や義成主の八個の伶俐の第一の君を静峯姫と嘆做して。十九歳ゆぞるるゆハ第二の君ハ城之戸姫第三の君ハ鄙木姫ふを同庚ゆて十八ゆ第四の君竹野姫と第五の君賓路姫ゆ十七八歳第六の君菜姫第七の君小波姫ハ共ふ二八ふるりゆ第八の君第姫ハ。年三五るりけれども既ふ生情馮て身長も大人備のるべ女兄君達ゆハ優まるふ似るる。反て第一の君ハ形貌小さく瘦肉るるべ那堂中ふ舞ひしとゆふ趙飛燕ゆを似るけん孰も稀る美人なれば肌膚ハ雪を塊ね玉を延るふ異るるぶ翠雲の長

やうなる立ハ裳裙ハ至るべ〜花ゐ〜べいまゞ用も櫛ハ毛月ゐ〜べ十ゐ〜ろ三日の影とゆ
のべ〜〜ん心ざゐも皆愚ゐ〜ぎ走筆縫刺の技へさらえ官絃の游ハ〜も疎かゞ。
生平ハ宇通保源氏物語を枕の友ハ〜と歌をさえ讀ゐふもゐり或ハ物の本を好
ミて文の支めゐも綴りて人ハ見せゐへねハ世ゐ聞えざるゐるべ〜間話題休慰而這
八個の姫上達ハ頭ゐハ玉を鏤ゐる花の釵児を戴ゐ身ゐハ縫箔捻箔色々の衣を
被飾りて儲の席ハ就ゐへ給事の女房ゆ〜も今宵を晴と打扮て各々も侍坐ゐ
なり是やまの錦の上ハ花を添ゐる温柔妖艶の妙ゐるも皆殊簾の内ゐれば犬士
ゆ〜の目ハ見えざるを憾とゝ〜。姑且〜て給事の老女出て來て二家老と八犬士ハ今宵の
壽祝を舒ゐ〜と却辰相清澄ハ事の進退を相譚ふよ〜ゐり其言果て退げば翠
簾の内ハ氣色〜て絳ハ染做〜ゐる八條の太緒を出されけり辰相夙く是を見て
立て其緒の端を含て徐ハ曳ゐまゐるハ長さ一丈二尺許ゐり既ハ曳出〜畢りて八

條を揃て席上ハ掛けば八犬士ゆ〜〜ゐ〜俱ハ徐ハ進ゐ〜ゐて各ゆ〜其緒の端を
含て各左ゐハ是を結びつ。引けば聊ゐ敵ゐり送ハ引ゆ〜引ゐ〜て竟ハ放ちゐハ
ハを各急ハゐ繰り寄ゐれば果して那方の緒の端ハ各其名ハ薄を附ゐ〜ゐ〜ゐ。
辰相則膝を拍て一箇々々ハ其緒を拭げつ得と見て聲高やゐハ是を讀を
内外齊一ゐ〜ち聞くハ第一靜峯姫上ハ大江親兵衛仁第二城之戸姫上ハ犬川
長挾壯太義任第三鄙木姫上ハ犬村大学禮儀第四竹野姫上ハ犬山道節忠
忠與第五濱路姫上ハ犬塚信濃戌孝第六栗姫上ハ犬飼現八兵衛信道第七
小波姫上ハ犬坂下野亂智第八第姫上ハ犬田豊後悌順各是を引ゐ〜ゐ天
緑の致を所御配偶皆定りぬ千秋々々萬々春と祝ゐれば翠簾の内ハも女房
等の聚聲ハて萬福々々と應へけゐ當下荒川清澄ハ准備の料紙硯をもて
件の男女十六人の名字二通を寫を程ハ給事の老女又出て來て両家老八犬士ハ

翠簾を隔て八犬士赤縄を援

清姫

文溪堂蔵

文溪堂蔵

事の欲びを訴ゑごとを清澄則疋配の一通を照ふとそ老女ふ遞與ハ受戴ゐて退り
ゆう。信而八犬士ハ當席を退きて。俱ふ宿所ふ罷るべー又辰相清澄ハ躰て
後堂へ赴ゐて義成主ふ見参ーて姫上達の御配偶ハ固様々々と雲ゑ上て
寫ゑー通を呈閲ゑねまゑ。義成主含笑ゑくつらくと是を見て六郎兵庫ハ
心も屬ゑや我女児毎の婚姻ハ前より あゑ定まるふ似ゑう故何とゑゆゑ皆是
名詮自性ゆり。譬ハ靜峯ゑ仁の妻ゑゑハ語ふ所云仁ハ靜之仁者ハ山を樂むと
ゆゑふ庶ー。然ども靜峯ハ十九歳ふあゑ仁ハ九歳の姉之何ぞ這年の長ゑるをもて
那箸の殊ふ劣ゑるふ合せーやとも亦後ふ知るよーゆゑん且城之戸ゑ義任ふ
於るゑ古語ふ義を守ると城の如ーとのふゑ由ゆり又鄙木ゑ礼儀ふ於るゑ其故
妻の雛衣と文字とを異ゑると唱ハ似ゑう。且鄙ハ犬村の村ふ對ゑべー又仁野ゑ
忠與ふ於るゑ忠ハ苦節ふ顕るゑ節ハ道節の節を即竹節之野ハ犬山の山ふ對ゑべー。

又濱路ハ甲非文ふゆゑー時戍孝の帮助を乞て且道節ふ那窮阨を極れゑう刎又
戍孝ゑ故の結髪の少女の名も濱路ゑ濱路ゑ雲ゆきゑ開ハ苦節ふ身を殺ーて今又ゑゑふ
濱路ゆり。ゑ且再生ふゆゑぎーて他ふ代るゑやのゑべゑゑん又菜ゑ信道ふ歸やゑも
由ゆり。道の信を做ゑ者ハ菜之菜ふ据ゑれば道ふ惑ふべー又小波ゑ亂智ふ歸や
ゑも亦語ふ所云智ハ動く智者ハ水を樂ひとゆゑふ庶ー水の動く時ハ波ゑ立ぐる
ゑー波ハ則水の皮之ゑ。其字水ふ從ひ皮ふ從ふ智も亦動ゑざれハ用る所
ゑー是智者の水を樂む所以欲又弟ゑ悌順ふ歸や悌ハ則兄ふ仕るの道ゑり。且
悌順ハ仁ゑ外伯父ゑれども反て悌王を乞ゑう其ハ行ふ由時ハ仁義の弟ゑ乞ゑるとを
乞ゑ。ゑの故ふ芳姫を乞て妻ゑゑ皆是名詮暗合ゆり。寔ふ不測のひゑゑ也ゑ其
理を推て解ゑゑハ辰相清澄感服ーて隱微發揮の御処解ゑゑ發事て解語化ゆゑ
現ふ天縁の動ゑゑき自然の妙契を知ゑふ足ゑうと稱て敬祝ゑうーゑハ義成主

課るやう配偶既に定りぬ其人夙く納采の礼を行ふべし。然ども犬士やはいまゞ其城に徙られば是等の事にも不自由なるべん六郎兵庫相資て東西皆質素に整させよと遺るくまなくを汲さ毋なべ辰相清澄兼りて軈ぞ退り出ける。然べ辰相清澄は次の日犬士等が出仕の折義成主の鮮なひる名詮暗合の妙契と納采進上まゞとある。仰を具に告知まれば大家感ぎる开が中に聞智がりふやう名美暗合のくひ共も昨霄臣等も宿所に還りて不圖思ひ設うしーるども。然まぞに深くに考果さゞ寔に舘の御宏戈感心の外いぶとそ其一二を説示せば戌孝も倶ふりふやう故の濱路のなひ共も只結髪のミなるに苦節を守りて命を惜まゞ夫人左母二郎に殺されて烈女の名をのミ遺ーるば我他ー女子を。娶らゞをのミ思ひ恐ぶ姫上も亦他と同名にて且甲斐峯の奇事あり竟に我戌孝と皆嫻自然に定りーに造化の小児の配剤欣一大奇事にいひたとひくべ禮儀も倶ふりふやう臣等とも離衣が腹を擘て玉を非て親の讎なる妖怪を仆せー他が功を思べ復娶るべくもあらざりーに離衣鄙木の稱呼似ーるに實に舘の御諭に断ー那緒を續る者欣とりふを義任推禁めて卒先舘に拜見して君恩を謝ーたるべーとりふて大家諾ふにて辰相清澄共侶に義成主の身邊へ参りて許嫁の恩偶を拜ーまつるべ義成主笑ーげに各天縁既に熟ーて我女児毎對をはされべ欣び是に優をおとるー。就て鄙ふもいひけらー。真利公谷柳九の女兄菖蒲羅媛の姪皆嫻の我意に政木大全の妻せるべ戈貌家門相應ーるーん士の美に明春下野長挾の媒妁ーて宜く相計はさ毋よーと仰ふ犬士等皆欣びて孝嗣も亦新参にて勤功久ーるに今又恁る恩命を他羨りいつ。さこそ感悦仕らぬとのに辰相清澄も。倶に祝頌まるるける。姑且ーて道節がのやう四境にくく理りて君恩隈なくに只廳南の一條のミ。まゞ其後の御制度を美ならぬ。那美に什麼と問

禀せば義成主點頭て然へとよ其事い六郎兵庫こそよく知りこれ先始うつげ告ぎやと仰ふ辰相清澄い阿と応つ忠與笑ふ向ひて各位も知如く降人武田左京亮信隆い去歳の十二月初旬水路の寄隊ふ従ふて三畏伐まべと請禀しん保質一條丹四郎信有をまわらせて舊罪赦免を願ひしべ舘其美を御許容あり て當日戰功衍ぎへ則他が願ひの隨意其舊領ある廳南の城地を返しあふべーとそ照文一通を合せるひき這美い大阪犬山の奉行ひー所ふれいのへでも与ふと ひるがら端倪い且如のどー。余るふ信隆い十二月八日の聞戰ふ定正主ふ従ひるがら。洲崎へいうち向つぎ。徑ふ艦を横行て上總の浦邊ふ推渡ー。悄地ふ廳南の城ふ造りて城の頭人江田九一郎宗盈ふ告るやう。唱ふへ里見殿と約束あるふ。則寄隊を欺き離れて目今歸着致ー。當所い里見殿の返しるひける我舊城でいへ速ふ開渡ーいへとて挑ぎーを。宗盈听ると然へとよ舘の御照書あるとも未

當所へ御下知ふ及ぶふ。ぐよ當城を遽與さんや。其美ふふべ且退ぞ。後の御沙汰を俟ふへとのみを信隆ぞのぎ既ふ照書あるる上い又今さらふ何ぞ俟ん疑しくい稻村へ夙く使を走らーね今速ふ遽與ふくくい咱い我二の城ふうち入てんと欲ふ果ぎ三七二十一ふ隊兵三百四五十名を萬ぞ二の城へ稠入りつ。那里を守る老兵を一人も漏さぎ追出ーて門戸を閉て執合ねべ江田宗盈怒ふ堪ぎ。急ふ士卒を推薦ぞ。撃ふ果さんとそ敦圍ふを第二の頭人畑夏作遽しく諫めそのふやう。信隆倘若無人ふれども舘の御書を照据ふ其美を訴まるふぎーと。同士撃ふを甘へ後悔あらんまの美を思ひるへぎやとのいまそ宗盈爭難て則急遽脚の使者をのそ。信隆の非理非法を舘ふ訴奉りて御旨を請けるふ舘い敬焉さのとくく其使者ふ仰まるやう。現ふ武田信隆へ智計あるふ似れども。其性奸慳ふーて獨立まき欲ぞ。ぐをとりて當城ふ來て恩を謝せぎ。徑ふ舊城ふうち入て又ぐく宗盈やるふ代ら

まくを他が理不盡勿論なれども今急ぎ撃果さば人の不仁ぬ似う非如
舊城廳南なる二の丸ぬ籠るとも僅ぬ三四百の隊兵をもて何事をか做ぬ給廳
南の民他が舊恩を徳とせで義成が民たらまく欲さば信隆竟ぬ身を措難て
悔て罪を謝まる日あらん他が敗を取折まぞうち捨て置べしと則下知状を宗盈
ら給ふぬ賜りて其使者を返しゆひけり是よりの後信隆い二の城ぬ在る所の戰粟を
食用ひて己が自恣せざるのみければ江田宗盈憤念ぬ堪ぎ屢使をまわせ
撃果さんとて請稟ぬ館いぬ来も許のぬぎ只うち捨て閣べしと殊なる御
下知なる故ぬ和殿等ぬい仰渡されぎ保質一條丹四郎をも斗が儘瀧田ぬ
留るのみと告るを道理節なめぬぎ。他が出没恣ぬ廳南ぬうち入りしぬ稟解よしなくらん。
然い館の御計ひ寛仁大度ぬ優なるぬ詞いまぎ訖ぎ一ぬ固の青侍廳の檐廊へ
來て告るやう廳南なる江田九一郎宗盈が武田信隆の事ぬ就て稟上へ義成主
第二の頭人畑夏作が信隆を將て参上りぬとのぬを義成主うち笑て世の常言噂を
まれば影刺とぬのるらん先夏作を召べしと仰ぬ青侍ところぬて遠しく退り
なるぬ八大士両家老い席を正して俟程ぬ畑夏作通豊い紋裝の儘ぬして青侍ぬ
引き來て義成主ぬ拜見を登時義成主い大阪大山二天をもて先其故を問せ
ぬぬ夏作則稟まやう武田信隆が非理非法の為体い曝ぬ訴奉りし如
介るぬ信隆が隊兵い甲斐の武田の士卒なれば他が威勢竭りて戰粟さえぬ
竭るを見て久しく留んとを欲せど日毎ぬ十人二十人病ぬ假托けなどなる。

議まるを亂智推禁めて大山井い遣へう信隆奸詐とりぬども他も一箇の豪傑なれば
道理を知ぬ者ぬわらじ他が出没恣ぬ廳南ぬうち入りしぬ稟解よしなくらん。
然い館の御計ひ寛仁大度ぬ優なるぬ詞いまぎ訖ぎ一ぬ固の青侍廳の檐廊へ
來て告るやう廳南なる江田九一郎宗盈が武田信隆の事ぬ就て稟上へ義成主
第二の頭人畑夏作が信隆を將て参上りぬとのぬを義成主うち笑て世の常言噂を
まれば影刺とぬのるらん先夏作を召べしと仰ぬ青侍ところぬて遠しく退り
なるぬ八大士両家老い席を正して俟程ぬ畑夏作通豊い紋裝の儘ぬして青侍ぬ
引き來て義成主ぬ拜見を登時義成主い大阪大山二天をもて先其故を問せ
ぬぬ夏作則稟まやう武田信隆が非理非法の為体い曝ぬ訴奉りし如
介るぬ信隆が隊兵い甲斐の武田の士卒なれば他が威勢竭りて戰粟さえぬ
竭るを見て久しく留んとを欲せど日毎ぬ十人二十人病ぬ假托けなどなる。

甲斐へ帰る去るべ残い信隆が従來る隊の兵五六十名ゐ做りゐけり。信隆是ゐ
ゐ憂ひていそのの地の荘客們ゐ舊恩を説示し。我軍役ゐ充んと思ひて
有一日小鷹猟ゐ假托けて士卒十名許を將て。悄地ゐ城外へ立出て地方の村長
故老等を幾名ゐ召よせ且ゐ曰。若們い我舊領の民なれば。今より我ゐ從ふて
二季の調貢いさらえ壮ゐ兵毎い我を資て第二の城へ看龍るべしといひしを村長
ら。ゐ曰。羨ゐ羨ゐ。詞ひとしく辭ゐ。當所い里見殿の御領ゐ。御仁政を羨ま
つるを。御恩の下ゐ。御身ゐ從へとゐ。御下知もゐ。ゐ然る僻事を仕らん思ひも
かけぬ。とて立去まく欲ゐを。信隆急ゐ喚禁めて。諭ども聞ざれば。竟ゐ怒ゐ
ゐ堪ぎ。七刀を見りと抜くゐも見せぎ。一人を礫と斫仆せば。大家驚き且怒て狼藉
者あり。極へと叫ぶゐ。四下近ゐ荘客們ゐゐゐ連枷を携て百十數名走り
來ゐ。信隆主僕を捕稠て面も振せぎ。撃悩せば。信隆も伴當も刀を揮て受

流し。打拂つ戰とも。多勢ゐ多ば物ともせぎ。剰加勢の荘客們。弥ゐ上ゐ聚合
き。來て。只直打ゐ撃し。信隆の伴當い一箇も遂ゐ撃仆され。信隆も防難て
既ゐ必死と見えゐ。折ゐ。城の頭人江田宗盈馬を蜚し馳出て喚ゐ。騎入
騎入荘客們を禁る程ゐ。宗盈の隊の兵も赶つ。城より走り來て。倶ゐ信隆を
救ひけり。當下江田宗盈い村長故老等を召よせ。事の起原を尋ねるゐ。信
隆が理不盡ゐ。然まで罪ゐ。荘客を矢庭ゐ撃ゐ。故ゐ壮佼児毎が
堪難て。其の趣舎ゐいとゐ。言分明ゐし。宗盈い村長等が訟ゐ及ぎして
芍且ゐも舊領主と聞詭ゐ及び。叱りて辱負を勦らまくゐ。斫られる
荘客い窮所ゐ。ゐ。ゐ。ゐ死ゐ至らぎ。又信隆の伴當い撲傷られ。ゐを折れ
脚を折ゐて仆ぎ。是も命ゐ。是ゐ命ゐ。宗盈急ゐ醫師を招て。甲乙
倶ゐ療治せ。ゐ五六日を經び。安ゐ。是ゐ荘客們を。金瘡児と

俱に還し遣り。信隆主僕をそゞ儘に城内に扶入るゝに信隆先非を後悔して宗盈に勸解るやう〳〵咱ら洲崎の陣に參らぎして當城のうち入りあへ西岐武士ふるゝびそゝ故何とゝふび定正主の隊を離れて裏伐せざるゝ是義之倘欺きて裏伐をせゞ開又悪の悪る者ゆゑ兇賊ゆゑ寺しゆゝ〜然ゞ裏伐をせざれども當家の御方に參し上へ功ゆゝとまゝかゝぎ又里見殿に請稟さゞ當城のうち入りしに曩に賜りし照書あり且這地に我父祖三世の舊領ゝれゞ民皆舊恩を忘るゝ必ず信隆に從ふるらんと思ひしに思ひきや莊客們に里見殿の善政を慕ふゝ信隆を徳とせざゝ反て事を惹出して這辱めあひけるに人を知ぎ己を知ざる信隆が不覚ゆゑ後悔臍を噬るのみいかゞ稲村へ推參して是ゝの罪を謝せまく欲を去の義を執達めまらしと啣言かまゝ〜くうち陪話て則神文の誓言書一通をまるらせて赤心を示ゝゞ宗盈〜やく受容れて臣畑道豊に其義を課て士卒百五十名と俱に信隆を送りて

參着仕りぬと言詳に告稟せゞ義成是をうちゆゝて信隆の誓言書を道節に讀せゆゝに歸降の文分明之義成憶ぎ含笑て然いとそのゝざるゝ欤信隆竟に敗を取て今に真實に歸伏せり然ゞとそ賞罰明らさまゝ後の驕臣を懲しかさうり信隆をゞ印東小六荒川太郎一郎に預けて城内なる一室に五十日閉籠措べ〜低ても怨ひるあるゝに我對面して舊地を返さん下野と道節に義を小六太郎一郎に伝ふべ〜と捉て江田宗盈に下知状を賜りつ畑夏作を労ゐて。廳南へ還しゝひけり介程に信隆に明相清英管りて龍居五十日に及ぶゝ聊も怨言なく只恩免を請ふと必えゝゞ義成主憐て這年の冬十月に武田信隆を召出して正廳に對面あり八犬士四家老并に政木大全助東小六荒川太郎一郎等を伴ひて登時義成主仰出さるゝやう武田信隆機変を獨立の罪ありとゝ人ども竟に見ゞるに新に真實歸降に及る上に舊

罪を赦免して舊領廳南の城地を返し與ふ今より機變を行ふとも只善
政を旨とせよ縱機變をもて恣ふ城ふ入るとも民從ぎい誰と俱ふ守らんまの
義をよく〳〵思ふべしと叮寧ふ鍼めぬ。信隆ハ頭を敲ひて義服せぎとのふこ
ろ。義成又仰せるやう。信隆士卒減少して五六十名ふ過ぎと。ぬ當城の士卒
假して大阪下野ふ送らせん。夙く還任致ぎべしとそ。身の暇を賜りけり。然ば大阪
亂智ハ士卒三四百名をねて信隆を送りつ廳南へ赴折義成主ハ保質一條
丹四郎信有をも信隆ふ從ハせて返しのふべくりしふ他ハ里見の德を慕ひて仕まく
欲しを願ひしふ。開が儘瀧田の城ふ在せて。蜜崎照文の隊ふ隷られけり。徒而大阪
亂智ハ武田信隆ふ相俱して廳南の城ふ來ん。城の頭人江田宗盈畑道豊ぎふ
君命を伝へ示して城渡のるを課まるふ他ぎも其あるふ沼めまべ事立地ふ整
ひそ信隆と交代を又宗盈道豊ハ這回の相計宜しけまべとそ義成下知して

他ぎまべ大江親兵衛が返しまりし上總國舘山の城の頭人ふ做しのふ。這
義も亂智伝達ぎとまべ宗盈道豊ハ宅眷并ふ士卒四五百名をねて。徑ふ
舘山ふ赴ぎそ那里の番士と六父代して生涯其城を守りけり又大阪亂智ハ
廳南の村長莊客ぎふ義成主の下知を傳て城主信隆と和睦せしめ且隊
兵二百名を留めて稲村へうり去りぬ然ハ信隆の宅眷殘兵の遠近ふ潛居う
者主の選任を傳ぎて皆歎びそ來ふければ稍大勢ふるり隨ふ里見の士卒
二百名をべ武田の老黨を相添て稲村へぞ返しける是よりの後信隆ハ〳〵其城
地を理しべ久〳〵廳南を有ちける。按まるふ房總志料上總の部ふ里見義弘の
時廳南の城主ふ武田信栄とふ者あり甲斐の武田の庶流とあの信栄ハ
里見ふ從ぎ獨立とのうり。意ふふ件の信栄ハ信隆より二三世の孫ぎるべし。但
信栄の事ぬまぎ詳ぎらぎれども作者前後ふ借用を看官是ぎの用意を知るべし。

第百八十勝里狐龍化石を貽して大蟬脱を八行壁を反して八行十世に傳ふ

復説武田信隆が廳南の城に還任して本領安堵せしのち千代丸圖書助豊俊も戰功ありて罪を許され其旧領なる上總國榎本の城へ還任せしより宅眷老黨共いさらえ安房上總に躲居る千代丸の残兵等早く其愛知りそ且驚き且歎び勇こて曰ふまで聚ひ來ふけるべ城内士卒ふ匿ふまで家門繁昌ふうける住而次の年の春二月義成主の八箇の小姐子。八大士ふ遺嫁のつみあり媒妁児東辰相荒川清澄這他老黨有司奉りて男女の伴當を點配を納采調度送りの式ふ當時よりむ人とふ書ふ詳ふそ足利家の時俗の禮を粗知る足まび又のべくもわふまふの時大士等の新城ふ成せざるもあれども居宅ハ都て造り出せしべ各其所をふそ新婦をぞ迎へける洞房花燭の歡會ハ賢も不肖も異なることなるべし。扨が中の大江親兵衛のぶ當晩靜峯姫と相衣合歡色のまふまそいまぞ臥蓐を俱ふせぞ悄地ふ是ふ告てりけやう見らく如く我身い大人備て心術こそ猩かふね年尚十五ふぞ足らざるふ夙く色情を動さべらふぞ。倘今男女の交を做さば曩ふ八百比丘尼狸の妖術ふそ立て浮名も亦さふふ人の疑ひを送さべ。ふの故ふ我年十七ふ至るまで峯上隔つる山鷄の雌雄の宿ふ倣まくまふの美を饒しふ久しと又他事ふ久く解示さを靜峯姫ふ申て宜ふ趣理りふ依り関睢ハ樂て淫せざとふ夫婦ハ一世の恩愛なりふるでふ添臥をのそぐ左右ふも御身の隨意行ひふと心ふ是ふの後六稔あまり枕を並て聯るまとみけれど然べとそ疎くぞ生平ふ良人を敬ひそ反て意中ふ親ふまり低而親兵衛が年十七とふ春の比ふ夫婦始めて衾を累て比目連理の枕を並ぶる遊仙窟中の夢を結びしを人後ふ曾知りて感嘆せざるふなりける。ふそ是後の

話し然べ大士ぢが婚姻の後政木大全孝嗣も亦君命のよりて大阪大川媒妁
ゆゑ真利谷柳九の女兄葛羅嫒と婚姻の欽びあり上總なる椎津の城より嫡女
同國東灌郡大田木の城へ迎入まらられて階老同穴の契浅らぎ又照文の女児
山鳩い年十三の比より吾嬬前ゆ給事しあり世まの時十八歳ゆて身の暇をあらて養
嗣紀二六の十二郎照章ゆ妻せけり皆是君恩の厚ゆよれば各其欽び知るべし介程ゆ
政木孝嗣ゆ既ゆ大田木の城主なれども いまだ房總の地理を知らねばまの年の夏義成
主ゆ願ゆ稟し七國中を徧歴を素ゆより微行なれば伴當などゆ最畧して士卒六
七名ゆ過ざるべし身も亦騎馬なりぎして歩よりゆくを便利とも先大田木根小
屋の城より遠くぬ東灌天羽の二郡より創んとそ普善村硯の里離色村を
過る程ゆ伴當の中ゆ御導の老兵ありて孝嗣ゆ告るやう方僅過せるべし普善村
硯ゆ在昔上總介廣常の住し所ゆて舘の遺あり然るを今い土人も知る者稀又

おくより程遠らぬ舘山の城の四下い昔者廣常の山莊なりければ今も舘山の名貼り
たり然い安房なる舘山と同じうらぎ是ゆゑ見ぬ世の事なれば正き照据もいぶ今現ゆ
硯ゆ隣なる乙埜村ゆ那神童増松和子の實父阿弥七叟の宿所ゆて それよりも
猶近なる這雜色村の内中字古江ゆ地方ゆ醫王山金光寺と喚做しなる一座の
梵刹ゆありゆ台家ゆ本尊い大日如來ゆ這金光寺ゆ廣常の子息の墳墓
ゆ因て山號を古塚山とも喚做しなり這寺内なる山脚を穿ちて洞の如くなる所ゆ
故なる無銘の五輪石塔波安ゆ土俗相傳て上總介廣常の墓なりとなり虚疾を
患る者其石塔の苔蘚を削含て水ゆ浸して飲時い即功あり瘥ざる者なしと
とそ折々其苔を採る者絶ざりといへ孝嗣うちぬて上總介廣常い鎌倉創業の
功臣なれども功ゆ誇りて忌憚らぎ屢嫌忌を犯せしゆ頼朝卿ゆ疑れて罪なく
誅せらるゆき三年い壽永二年の支なりなを載て東鑑ゆ詳し先や我も立ちて其

石塔婆を見てあらんと応つ歩を運めて稍金光寺の門前投て來かける程に天猛可に結陰りて疾電光勁風に雨さえ颯と降沃ぎて乾坤忽地野干玉の烏夜の如ぬるかどーもわらぎ。數道の金光四下を射て天より煌と墜る物あり其音大地も頽るく如く人堪べくもあらざれば孝嗣主僕い吐嗟とだろり赴りて老る松の下に身を潜しつ忙然と聚立てありける程に姑且して雨歇天霽て日光隈なく刺を隨に孝嗣主僕い晴を定めて目今天より墜さるい何あらんとそ俱に見るふ正に是最大きなる石ゆぞありける。聲言ば其形狀宛蟠る龍の像く頭を虬に似て虬にあらぎ。狐にも似くる樣ゆそ尾とおぼーしき者九ッゆて縱横約三尺計。紛ふべくもあらぬ白石なれば。伴當訝る所が中に孝嗣いつらくと見つ吐嗟に思ふやう原來這狐龍の化石い政木狐が約束通つぎ。他い既に數晝て終まに示せーるふん奇之々々とだろりに只顧感嘆ぢぬる折ふ。這寺の門内より沙弥道人と共伴に立出る三個の武士あり一個い年四十許兩個い三十前後ゆそ孰も骨相鄙ふ。一對ふれど各各身ゆい葛の野袴に裙裂の單外套を被て大小の兩刀を帶るが伴當瑕兵とおぼーしき者十四五名ど從ふる。約其ゆの僧俗い墜る化石と孝嗣主僕の立在るを見出して眄を洩しつ指さて那人達い震れもせでよくこそ堪れ最奇とゆに間に一個の武士い孝嗣を見て并い政木主ふぞるや武田信隆ゆていとのいまそ又孝嗣も急に其方を見つて然へいぬる比稻村ゆそ初て對面致る武田主恙ふ紀や廳南より路近ふぬ當寺へ何ぞの所用ありてみぎりふ詰ふひーると。問れて信隆然へ咱ぞい前月痾疾ゆそ醫療即効ありーしば俗説に從ふそ當寺へ使を遣しつ上總介廣當の五輪石塔婆の苔を採せそを服用ありひーに疾病立地に癒り果しつば感謝に堪ぎ悄々地に賽を為ひるる和殿い又何ぞの所用ありて這頭を過りのひぬる折ふ今の

暴雨天変恐るべき這大石の樸を祭りけんは是高運の致す所神明佛陀の加護なりん寔に賀まべりくと祝せば孝嗣礼を返して。原來廣常の墓石の苔は効験虚談にあらざりけり。洒家い新参にていまだ二總の地理を知ねば館に願ひ奇りて隈なく履歴まねる隨に當寺に廣常の五輪塔ありと聞て知りて見まほしと思ひて來ければ暴雨に路を去あぐ。剣化石の天降るに逢ぬ在昔唐山姫周の時宋に石墜る者云云と春秋左傳に見えたり或い又星墜て石になりしの者あれども是いそれに同じからぬ。見る狐龍の化石とのふを信隆訝りて。狐龍い柳何なる物ぞと問い孝嗣然いとよ白狐既に千歳を歴て其功徳夙なる時い化して龍になる物あり。是を狐龍と喚做しなり。あら傳ふの事なるぞ去々歳の夏前面の岡にて我必死を救ひしなる政木狐即是之這政木狐の事いまも説まくまろに言及けるべ亟に両個の武士も共伴に找こ

孝嗣にうち向ひて政木主初て拜面仕る準職なれば館山の城の頭人江田九郎宗盈畑夏作通豊ゆそいと近曽館の仰ふよりて廳南より移轉して館山に在番仕りに。這頭なる神社佛閣の古記録什物を展検の為に今日來當寺へ來ければ料らず武田主に來會せり。今又和殿に對面の歓びへ只是のみならず。耳新きまき狐龍の化石を見聞幸ひヨタろうとのへば孝嗣礼を返して豫て聞知る江田畑両生思ひ設けぬ對面いよ〳〵折ふしの却這化石の事に就て當寺の住持に面談して請まくのみ思ふ。ありいろの詞を添ひねと憑べ宗盈異義もなく開いころ〳〵誘ひ客殿に且猶餘談を兼らん武田主も共伴にと誘引立れば畑通豊い先に立つ案内をす。然い政木孝嗣い信隆宗盈と共伴に自他の伴當を相従へて引まて寺内へ入る程に沙弥道人い側聞して疾方丈へ出んとて走りて先へ退りける。

文溪堂藏

文溪堂藏

迹ゆへ近所の荘客们天より降る石を見んとそ走り聚ふ者堵の如し又寺より
年少き生僧等の立出て觀もヨメくるべし。余程ふ政木孝嗣い武田信隆江田宗盈
畑通豊等ふ案内をせしまそ先廣常の墓石を見るふ果して山脚ゑ沙洞の
内ふ在り。現ふ最小ゑる無銘の五輪堂ゑれども。半分い亡て高さ二尺ふ足らぎ。只
青苔ふ裏ぢそ。そもちとも見えざりしば孝嗣い憮然とし一霎時謂して且いのやう
在昔上總ふ廣常い當國の人ふして二萬騎の大將ゑりしゑ。ゑるとも身へ誅せ
ら是國亡びて子孫断絶ちるよう。今ト至りて觀へ来者い只羊体の五輪堂のみ
抑亦悲しゑ世ふ相將の威權壮ゑるとい車馬門前ふ満さる日ゑく倘
其職を去るとい殿庭ふ雀羅を張べし。栄枯得失の理り誰ゑ竟ふ免るべ
とのべ信隆。宗盈通豊皆共侶ふ嗟嘆しゑ打連立て玄関ふ赴けば役僧
早く出迎へて。躯て客殿ふ請待を孝嗣則正客ゑり宗盈信隆い左右ふ

通豊い下坐ゆぞ侍りける。恁而看茶の礼畢りて住持出て對面を當下江田
宗盈い住持ふ孝嗣を引合して化石の事を説示せば孝嗣則住持ふ向ひて方
僅當寺の門前ふ天降りし狐龍の化石い咱ゑと由縁ゑる白狐の終焉を
示せしと其故い箇様々々と政木狐の事の顛末他い孝嗣の母ふ受しる舊
恩を報んゑふ去々歳の夏前面の岡ふて妖祟をりて孝嗣の寃屈の死刑を
救ひしゑ當日他い功課満て狐龍ふ変て不忍の池より外天ふゆる折後三稔を
歴さりんゑい當國ふて其終を見るよしもあらんとふ〜ゑまで説示して又いやう
這奇事い我のみゑらぎ當時犬江親兵衛も目撃ちゑる所ゆぞ狐龍の先言
果して遺ぬぎ。一大奇事ふいはぎやとのべと詳ゑりければ主客齊一驚嘆して異聞
ゑりとぞ稱ける。當下孝嗣又のやう右ふ就て咱ゑる情願ゑり。いうで件の狐龍の
化石を當寺内ふ埋葬して塚を築まく欲を。雑費い大田木へ歸城の後必調進

致さんとて。住持いろいろ仕て其義あらえいべども。當寺の上總の広廣常の五輪石塔婆あり。在昔近衛院天皇の御時に妖狐変じて宮嬪玉藻前に化て帝を惑しまゐらせしかば詔して天文博士加茂泰親に禳せのべ妖狐竟に勝ずして。走りて下野なる奈須野に到て躲れぬ。於是三浦介義明上總介廣常千葉介常胤等に詔して奈須野に到て狐を獵しむ。件の妖狐い廣常が射箭に竟に斃されて。化して一箇の毒石に做りぬ。世に殺生石是なり。彼と此とは異なれども其跡太狐とおらんの化して石に做りしを當寺に埋葬致さんべ是廣常の忌む所。那靈安ゆうぎやあるべからん。這義怎麼と談ずるを孝嗣い安めんぢ長老の言錯へり。那九尾の妖狐玉藻前の小説い近曽明船の齎らす封神演義に倣ひしる。稗官者流の新作に素よりあるべき事なるぞ。然を昨今世に見れる下學集に是を載又能樂の謡曲にも殺生石と題目して作設しけれい奇に走る今の世俗いひもて傳へて故事と思へり。那奈須野なる毒石い砒霜礬石の類なるを。附會してのふるふん非如其事ありとそも玉藻如きい邪物に至る所人に尊ぶ。政木狐い靈狐に勤所世に功あり。廣常這理を知らざいんや。那人倘靈ありとても決て忌嫌ふべからぬ長老ところ安くるべしと。鮮はて住持い頭を撫て拙僧軽戈にして失言せりいろ。海容あれかしと勸解れい宗盈執合ちて政木主説ひて妙に長老も亦出家の本性怒を飾らぬい人の及ぶぬ所にて共に感心の外なし。那化石を牽入まそ埋るまでの夫役なりい卑職都て衆莊客に課す事なく計ひてんとのふに住持も孝嗣も相歡びつ是を謝して要談既に果しぬべ住持い弊して退りけり。登時又役僧に沙弥に課て茶を薦め果子を薦めるどもする程に信隆い孝嗣の戈を感じて旦のやう大全主い妙年なれども玉藻狐の事なども論辨老儒も及ぶべからぎ。就て学問せまかしぬよりあり。狐龍の事い何なるの書に載らるを。

知らぬ。必出所あるらん。少まく欲しうれと問い孝嗣然べとよ。狐龍の事は曩に大江親兵衛が既に見る所ありて奇事記に出ることなれば今按ずるに淵鑑類函狐部に載されど空言なりんと思ひしに疑ひ解ていとゝなれば信隆點頭て現に書に見るべき者なり。今博識の教なくば誰か狐龍の出所を知らん歟。是に優者なり。然ども狐龍升天の事に就て猶疑ひ思ふよしあり。嘗聞義實老侯少なりし時結城落城の日に死を免れていくぞ安房へ渡さんとて相摸なる三浦の海邊に船を徴めるに程に白龍俄然と海より起りて天に登るを見るに其人の死とのなり。龍は鱗虫の君にして其徳を王者に比す。源氏は素より金徳なれば色は白を貴ぶ。然べなれば義實主安房に造りて幾程もなく神餘の為に義旗を揚て逆臣山下定包を誅戮せしより。満呂安西さ伏誅して安房西郡を併呑し。更に上總を討従へて北さ賢君のゆゑなり。其子義成王又出藍の譽れ高く。遂に上總人の従ざるを威服して上總半國を討靡け善政施さるる所あれば國民皆堯舜の思ひを做せり。其仁義良善の君なるを思ふに今の諸侯又一人として儔なるべくもあらぬ。列聖八大士及和殿の如き英武賢戈の良臣多なり。且白龍の祥瑞あるを思へば。竟に足利氏に代りて天下の連師なるべき者は必里見氏なるべ。然いなくて東南の一隅偏小なる安房上總を領まるのみ下總半國の外に又地を増すをいぶ。去歳の冬西管領と戰克て偶攻捕る敵の三四箇城を和睦の後に返し與へて。鄙語にいふ濟ても三百労して功なしといふべき。然べ祥瑞も負きぬべく。仁義も亦益なし。賢兄必辨あらん。爭何ぞ論ずれば孝嗣莞爾とうち笑て否我思ふよりは。那白龍の事は孝嗣も亦傳聞なり。那時龍田の老館に龍の服をのみ見あれて。龍の頭を見ぬ。因て思ふに老侯御父子は。仁義賢明の君なれども。徳を

中國の施主を沼ぞ。反て八犬士の如き賢佐腹心の良臣を得ゆゑに祥瑞
ありけん。又那時隨從の西家臣杉倉氏元。堀内貞行が只其龍の尾を
見しのみ。子孫末世に至るまで當家の冢宰たりぬべき。祥瑞ありけるゆゑ知ぬ
然れば君賢まして。臣も亦賢なれども只褊小の國を有ちて兵馬連帥の大權
執るふ由なき者。和漢に又ぐ是則天之命。請唐山漢末三國の成敗をもて
是の譬ん那昭烈劉備字玄德い賢君。當時十八諸侯ありとも。其仁義忠
信ふかく及ぶ者なし。且是の相たる者諸葛亮龐統。法正費禕蔣琬
馬良姜維の如き賢佐忠誠の衆臣あり。又五虎の勇臣関羽張飛趙雲。
馬超黄忠の如き者數ぶ。あれども。呉魏を討事ゲて漢室を再興
まるとをめぞ。巴蜀褊小の地を有ちて僅に帝號を稱まるのみ。是則天之
命。人力の及ぶべきゆゑ。後帝劉禪不肖まして。佞人黄皓を愛ましぬ。

父子俟に二世四十餘年ましを國亡びぬ。初昭烈の蜀ふうち入りし時。成都の
火井のり。是よりして其火漸に壯ぬ。漢の火德の色に赤を貴べり。是昭烈の漢に
續て大位に即ぬ祥瑞とのり。然べや其帝號を稱まるに及ぶ。件の火井のよく燃て
間断ぬ。恁而昭烈帝い崩ぬ。諸葛武侯も薨じぬ。其火漸に衰て後竟に
燃ざるぬ。有恁れば其火井い昭烈の為に祥瑞なれども。後帝に凶兆と曹操
曹丕い漢賊。曹丕が漢の獻帝に逼りて。其位を簒ぶに當りて魏王宮前
の露井より黄龍出て天に升りぬ。魏い土德にして色い黄を貴べり。則是曹丕が
漢帝の禪を受て大位に即ぬ祥瑞とて。年號を黄初とも。ありれども。其実い
簒奪。何の受禪。是ゆゑ譬べ曹丕の如きの人を結杙て其衣裳を剥
合ゆゑ。我這人より。衣裳を恵れうとのゆゑ如し。然を天神地祇順逆の理を
知らで只其勢利に媚るの故に以祥瑞を降さんや。縱其事ありとも。偶然に

あゝ嘉瑞のあらぬ然いあり順逆邪正差あるとも。魏も亦蜀漢の後る者僅か一稔竟の司馬氏の簒奪せらるゝまであり亦四十餘年のあて國既の亡びけり。是の由てあるを觀れば成敗をもて人を論ずる者い天命を知らざるゝ又徳を脩ずして祥瑞を負ゝそみづから允さず世の胡慮のるゝんのゝ最憚りあるとみづから老館の見るひとる。那白龍の祥瑞も亦當館の御善政も城を屠り地を畧して我封内を廣くまゝ兒為のあらぬ民の父母る心をもて國安らまと思召まゝ人分を知ざれば貪て飽とるければ苗害踵を旋べらぬ。非如我君房總両國の守のして地を増ふるのあらぬとも良將の御名後世の流芳して。御子孫長久るらんのい仁義善政の大益あり。仁君賢者の慎懋めて常の樂ふ所い只是のゝ何ぞ裨益るとのみや。あれども陽春白雪い調高りて恐らく俚耳の入りがたらんと思ふい什麼と理を推て言詳の辨ずれば信隆い阿とだろのの一要時感嘆の聲をるゝまで又宗盈も通豊も瞭の杙むを覚ぬまでの耳を敬け心を澄して正論々々とぞ稱ける。姑且て信隆い急の貌を更めて。孝嗣の謝してのゝやう。通愛ゝの和殿の英戈今の世のい多くいるぐゝ。里見殿の盛徳るる八犬士ゝ和殿さゝ王佐の戈ある賢者を得のひぬることを幸るれ我聞所をもてのつぐ。山林房八と和殿を犬士の外のせゝ造化の小児の脱落欠然ざいい是も天命るゝん。惜むべしく。與言るを孝嗣恋いせず。庭の樹柱を見ゝて日景い既の斜のるゝぬ所要い夙く果さるの鈍や晤譚の時を移ゝぬ退りて路をのそべゝ。とのべ信隆諾るひて咱ずも潛行るの。虚々とて居ゝるのあらぬ。卒供侶の身を起せば宗盈と通豊い留難く目送る程の役僧も亦出て來て且管待の疎畧を陪話て玄関までぞ送りける。低而武田信隆い伴當をのそぐゝ立て別れて廳南へかゝりゆく程の孝嗣も

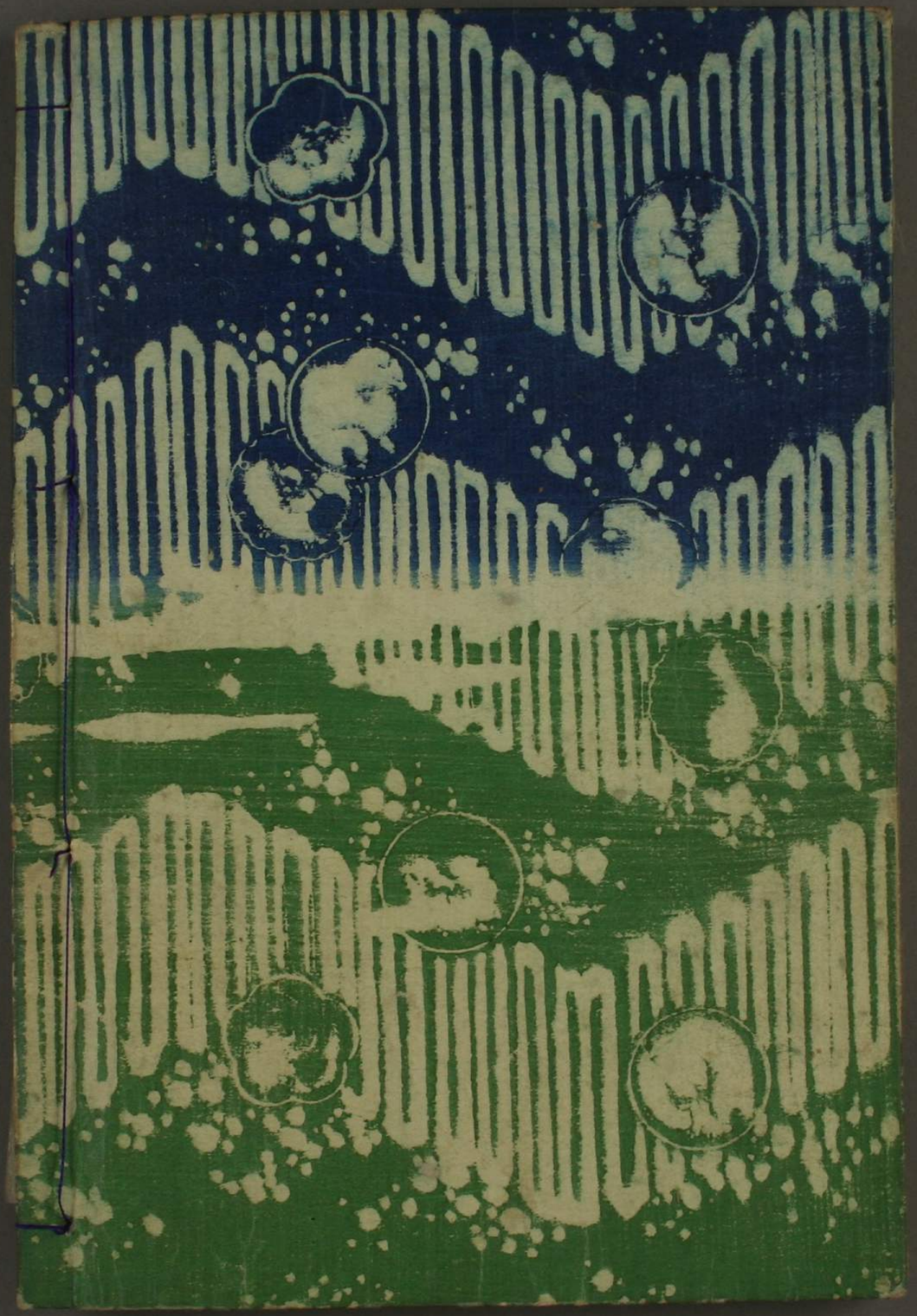
亦伴當を従へて這邊なる村里を漏さず巡歴をりける。小程ゐ武田信隆、其
通路思惟るゐ里見君臣の英武と幹且政木孝嗣の妙論理辨ゐ感服て。
及びぐさーを心ゐ恥て是より機変を行ふとなく生涯里見ゐ従ひけり。然べ政木
孝嗣へ又幾の日を累て上總を送るく撿果ーるべ。下總へ赴くを東西と經
歴をり遂ゐ武蔵へ立踰て三親の墓詣せーるゐど既ゐ前回ゐ具るれば言肖て
寫さぎ看官前後を照ーて見るべー。低而政木孝嗣いまの年九月の下澣ゐ
届りて。雜色村まで久り來り。躰て金光寺へ立よりて。曩ゐ住持ゐ憑ぞーる。狐
龍の塚を閲まるゐ廣常の五輪石塔波を去ること五十歩許ゐ七件の化石を
埋めて呼ゆ。塚の高さ三尺許ゆ。上ゐ一ゐ固の窣都波を建て孝嗣心歎びて。
寺の玄関ゐ呼ぶひ。却役僧ゐ謝美を舒て退りて大田木へ歸城をり其後使を
金光寺と。館山の城へ遣ーて住持と江田宗盈ゐ化石埋葬の雜費を選ーり。

又金光寺へ米錢さ布施ーて欽びの心を盡ける。然程ゐ土人ゐ其塚を見て奇
特を稱て訛りて狐塚と喚做ゐーるべ。金光寺の山號なる古塚山の古の字を易て
狐塚山とぞ唱ける。按ずるゐ房總志料上總部雜色村の條下ゐ云古江の金
光寺ゐ狐塚ゐ今ゐ其所知まぞ是ゐ因て金光寺の山號を古塚山とのひーて。
後ゐ狐字を嫌ひて殷酉王山と號まとのーり又廣常の石塔波の名を鮮の瘧疾を
治まるとゐども同書ゐ載るを借用を看官作者の用意を知るべー。問話休
題。是年八犬士も婚姻の後義成主ゐ請まりて各故郷ゐ赴くを二親及親
族の墓詣せーとゐども既ゐ前回ゐ寫ゐーー如ー开ゐ中ゐ大塚信濃成孝ゐ曩ゐ
義兄弟等ゐ貸る金をゐの時送るく選ーて。雜費の資助ゐ与けり又大山道節ゐ
二親と異母の女弟濱路の墓を安房の延命寺ゐ建るゐ及びて成孝又其資助ゐ
うーと勘ふぞ濱路の墓へ大塚ゐ建べーを道節ゐ圓塚山ゐて濱路の横死の折ゐ

ゆゑあり。ろをゆく。ゆがーさもだらう。うちくとさ。まさとゑぢ。ゑたぐ。くさそう。りんこん。
環會て且其寃家網乾左毋二郎を擊果ーー又濱路の亡骸を火葬たける因縁あり。
支是始めて終まくゆめるべらぎとそ。強て施主のりーるこ是ぞうゆ上の略ーてあゆ。
詳を看官前後を併見るべー。却説政木孝嗣い大田木へ歸城の後稻村の城へ
參上りて。飯府を告奉るゆ大塚犬江犬村の三犬士も既ゆ出仕ーてありーるべ孝嗣へ
親兵衛ゆ狐龍化石の事の趣を云々と告知らまるゆ親兵衛自餘の二犬士も
其奇ゆ驚くまでゆ靈物の終めるを俱ゆ感じめりける。恁而件の三犬士へ義成
主ゆ政木孝嗣が國中を檢歴去果て謝恩の為ゆ參上りーりを告まりーるべ。
義成則孝嗣を召よせて。旅中の事を問めゆ。件の三犬士も伐らーう。當下義
成主い孝嗣を近く伐らせて。汝經歴の間我封内の要害へ皆檢たつゆん意見も
あらべ。ままくかーを仰ゆ孝嗣額を衝て然ゆ御要害皆堅固めて禀上べるるも
いなぞ。但ー國府臺の一城へ前へ暴河めて。後も岐川ゆ。犬敵を防ぐゆ足れり

然けれども。後の川へ浅瀬めて其實へ沼ゑ暴ゆ臣ゑ。那里ゆ在りー日件の川ゆ。
鶴の降て求食を見う。敵倘其浅沼ゑを知りて。鬪戰闌ゑゑん時渡ーて城の後
より。稠入らべ防ぎぐさくやいんとのめをうち。犬塚犬江へ愕然と面を注ーて臣
ら。ゑも暴ゆ那城内ゆ在りーゑ。其義ゆとろ屬ざりゑ。然ゑを大全が見出ーて禀
上るとて幸ゑりけれとりべ義成主點頭て好々我とろ思ゑう。私よりくと推禁
めて其後國府臺の城の頭人真間井秋季。継橋喬梁ゆ書を賜りて。
悄地ゆ其義を戒めゆ。其書の末ゆ。遠くともむゑ隱れゑ敵の見えぬうー
ろゆ用心をせよとありーるべ。秋季喬梁謹義て。城の後ゆ由斷せぞ戍を固く
ちうーゆ是ようの後數世を累て里見義弘の時ゆ至りて北條氏と國府
臺の鬪戰ゆ敵那城の後の岐川ゆ鶴の降ーるを見出ーて浅瀬めるを悟りー
べ。一隊へ急ゆ城を攻一隊へ悄地ゆ後ゑ。浅瀬を渡ー塀を破りて短兵急ゆ

攻入りければ里見の士卒は勝ぎして。竟は落城あらうとのふ益義弘は武勇餘れども文学は疎ければ先祖の送訓を知ざやありけん惜むべきなり。今國府臺の城迹を見るに那岐川は横八九間もあるべ。深水ゆゑ。鶴の脚の立べくもあらぬ。今の如くあらんは敵の輒く渡ーぐらふんは當時は実は浅沼なるを暴河の水を引入れそ川の如くは見せるなるべ。畊田鋤れて海となる。古今の変革凝ふべくもぎ故を温て新を知るを学を好むとのふべ。況のみあらを是後の話し却説犬江親兵衛いはの日義成主は政木狐の支の顛末をは固様々々と告稟せば又政木孝嗣も狐龍の化石は做りて金光寺の門前は天降りーを寺内は埋めーるを笑を上るは義成連りは笑局は入りて餘談盡せば見えるは大の段は猶長ゆるなれば這勝回も上申下は駑て又下回は解分るを聴ねー。

南總里見八犬傳第九輯巻之五十一終

○東京堂蔵